

【前回の復習と補足】

1、言明のBedeutungは同一性である

同一性言明の中のある語をBedeutungが同じ語に置き換えても、その同一性は変わらない。
したがって、同一性言明のBedeutungは同一性であると考えることが出来る。
ところで、全ての言明は同一性言明に言い換えられる。
ゆえに、全ての言明のBedeutungは同一性である。

2、言明のBedeutungを同一性で見なすことは、言明のBedeutungを真理と見なすこととは両立しない。

- ①一つの文の異なる言明は、異なる焦点をもちうる。
- ②ある文の焦点の違いは、それがどのような問いに対する答えであるかの違いであり、それはその文を同一性文に書き換えたときの違いになる。
- ③一つの文を異なる同一性文に書き換えても、その文の真理値は変化しない。（それは、能動態の文を受動態に換えても真理値が変化しないのと同様である。）
- ④しかし、異なる同一性文の発話は、異なる同一性、つまり異なるBedeutungを表示している。
- ⑤従って、言明のBedeutungを同一性であるとするのは、言明のBedeutungを真理値と見なすこととは両立しない。

例えば、次の二つの同一性言明の真理値は同じであるが、同一性は異なる。

「一筋の街道が貫いていたもの＝この深い森林地帯」

「一筋の街道がこの深い森林地帯に対してしていたこと＝貫くこと」

3 言明のSinnは、文の言明を同一性言明に直す仕方である。それは、言明のBedeutungである同一性が与えられる仕方である。

①「民主党の党首＝日本の首相」

②「菅直人＝日本の首相」

①の左辺を同じBedeutungの語に代えたので、①と②の文ないし言明は同じBedeutungをもつ。
しかし「民主党の党首」と「菅直人」はSinnが異なるので、①と②の文ないし言明のSinnは異なる。
①と②は同じ同一性を指示しているが、①と②では、その同一性の与えられ方が異なる。なぜなら、左辺の語の指示対象の与えられ方がことなるからである。つまり語のSinnが異なるので、言明のSinnも異なる。

（ところで、同一性が成り立つことが、言明が真であることであるので、その意味では、言明の真理値の与えられ方（言明の真理条件）ということもできる。このときの真理条件は、文を同一性文に変換したうえで、デイヴィドソンの真理理論におけるT文として、与えられることになる。）

4 同一性とはなにか。

(1) 同一性の定義？

「同一性」の定義としては、ライプニッツの法則が適当であるかもしれない。Leibniz's law には、いくつかの表現方法がある。

(a) $a = b$ iff a と b が識別不可能である。

(b) 「 $a = b$ 」 \Leftrightarrow 「全ての F にとって、 $F a \Leftrightarrow F b$ 」

(b) で説明しよう。

① 「 $a = b$ 」 \rightarrow 「全ての F にとって、 $F a \Leftrightarrow F b$ 」 (同一者不可識別の原理)

② 「全ての F にとって、 $F a \Leftrightarrow F b$ 」 \rightarrow 「 $a = b$ 」 (不可識別者同一の原理)

①は成り立つが、②を検証するには、あらゆる性質に関して調べる必要があり、それは不可能である。したがって、経験的な対象に関しては同一性を不可能である。

(2) 対象の同一性か、表現の同一性か

クワインは同一性について次のように述べている。

「ウィトゲンシュタインが同一性の概念に反対して「二つの事物についてそれらが同一であるというのはナンセンスであり、一つの事物についてそれが自分自身と同一であると言うのは、何もいったことにならない」と述べたとき、彼の誤謬は一層はっきりと見て取れる。もちろん実際は、真であって役に立つ同一性言明は、同一の事物を指示する互いに別の単称名辞から構成されているのである」(クワイン『言葉と対象』訳189)

「同一性」は対象について語るとナンセンスであるが、二つの語ないし概念の関係としては有意味である、というのがクワインの主張である。しかし、「ある対象が、自己自身と同一である」が何も言ったことにならないのと同様に、「ある表現が、自己自身と同一である」というのも何も言ったことにならない。「二つの対象が同一である」というのはナンセンスであるのと同様に、「二つの語が同一である」というのもナンセンスである。

「 $a = b$ 」は「二つの語「 a 」と「 b 」が同一である」と述べているのではない。「 $a = b$ 」では、語「 a 」と「 b 」は言及されているのではなくて、使用されているからだ。同一性文が表現しているのは、②ではなく③である。

① $a = b$

② 「 a 」 = 「 b 」

③ 「 a 」の対象 = 「 b 」の対象

フレーゲは論文「意味と意義」の冒頭で、同一性は、対象間の関係ではなく、名前あるいは記号間の関係であると述べている。彼がその理由として述べることは、「 $a = a$ 」と「 $a = b$ 」の認識価値が違うことをいうことである。つまり、フレーゲは、この二つの命題は、同じ同一性を表示しているのではなくて、異なる同一性を表示していると考えるのである。

私は、前に述べたように、この二つは同じ同一性を表示しており、その同一性の与えられ方がこ

となる、というべきだと考える。

では、我々は、③をもとに、同一性は、対象の関係であるというべきだろうか。しかし、対象が同一であるというのは、ウィトゲンシュタインやクワインが言うように、奇妙な感じがする。しかし、それを名前の関係だとすると、②のようになり、認められないだろう。つまり、そのどちらとも言えない。「同一性」という概念は、難物だ。

「 $a = b$ 」の真理条件と主張可能性条件を考えてみよう。

(T文) 「 $a = b$ 」が真であるのは、「a」の指示対象と「b」の指示対象が同一であるとき、そのときに限る。

(A文) 「 $a = b$ 」が主張可能であるのは、「a」の指示対象と「b」の指示対象が同一であることが主張可能であるときその時に限る。

A文の右辺が可能であるためには、「a」の指示対象と「b」の指示対象が同定可能でなければならない。「a」の指示対象が同定可能であるとは、それが与えられたときに、「a」の指示対象であると解る能力があるということである。つまり、二つの表現の同一性を語るには、表現の指示対象の同定について語るが必要になる。

対象が同定可能であるとは、それを再認できるということ、つまり、それをもう一度見たときに先に見たものと同じものだとして解るということである。対象を指示するとは、対象をこのような意味で同定可能なものとして指示することである、言い換えると、対象をある一つの対象として指示することである。

(注：同一性が同じであることの多義性)

用法1：同一性は、関係であり、どのようなものについて成り立っていようと、同一性は同じである。

用法2： $a = a$ と $a = b$ の同一性は、同じ対象について同一性を語っており、その意味で同じ同一性であるが、 $a = b$ と $c = d$ の同一性は、もしこれらが異なる対象について同一性を語っているとすると、二つの同一性は異なる。(問答意味論での用法)

用法3： $a = a$ と $a = b$ は認識価値が異なるので、異なる同一性である。(フレーゲがこの用法を採用する。)

(注：前回次のように述べた。

「問答意味論によれば、ある言明が真であるとは、それを同一性言明として解釈した時に、同一性言明の主張する同一性が成立すること、言い換えると、右辺と左辺の表現の指示対象が同一であることである。ここでは、文の意義と何かとの一致を主張しているのではない。したがって、真理の対応説が陥る困難に陥らない。」

これに対して、原井君から反論があったので、それに半分答えたい。通常の真理の対応説とは、文ないし言明が真であるとは、主語が対象を指示し、その指示対象について、述語が述定する性質や関係が対象について成り立っていると考えることである。つまり、文はある対象についての何かを

述べており、その述べられていることが、その対象についての成り立っているということです。これに対して、同一性言明では、対象の二通りの指示があるだけなので、述定が対象に妥当するかどうかという問題が生じない。もちろん、述定にあたる内容は、指示表現のなかに取り込まれているので、対応説の抱えていた問題が解消するというのではなくて、それが別の形に置き換わることになるということである。)

§ 1 2 指示と同一性

1、指示はいかにして成立するか

(1) 指差しと一語文

幼児の発達過程において、言葉による指示の前に、指差し（の理解や行為）が成立する。指差しの理解や行為は、共同注意として成立する。

例えば、幼児に対して、大人が天井の蛍光灯を指差して「デンキ」と言うことは、語を発話することではなく、文を発話することである。なぜなら、その発話には真理値があるからである。この発話が文の発話になることは、つぎのように理解できる。

大人がある対象を指差しながら「何ですか」と問い、幼児が「デンキ」と答えたとしよう。この返答を完全文の言明に直すと、これを次のように書くことができるだろう。

「<指差し>=デンキ」

なぜなら、指差し行為はある種の言語、つまり身振り言語だと考えられるからである。ここでの、指差し行為+語の発話は、ある種の同一性言明として解釈できる。それゆえに、この一語の発話が真理値をもつことになる。それ以外には解釈の仕様が無いのではないだろうか。

因みに、われわれは書き言葉、話し言葉、手話、モールズ信号、手旗信号などのほかに、身振り言語を持っている。例えば、

- ①決定疑問を問われて、首を縦に振ったり、横に振ったり、両手を挙げたりすること、
- ②賛成を表す挙手や、話したいということを伝える挙手、
- ③指で数を示すこと、
- ④対象や相手や自分を指差すこと、
- ⑤両手をあげて人差し指と中指を曲げて、引用符を示すこと

などである。

対象を指差しながら「これは何ですか」と問われて「デンキ」と答えときには、その返答の同一性文は

「これ=デンキ」

となるが、より正確には身振り言語も加えて、

「<指差し>+これ=デンキ」

とすべきかもしれない。

(2) デイヴィドソンの指示なき言語論への応答

デイヴィドソンは論文「指示なき実在性」(‘Reality Without Reference’ 1977) (in *Truth and Interpretation*, Oxford. 1984) において語による対象の指示を説明できないことを主張している。

彼は語による対象の指示を認め、そこから複合表現や文の意味をや真理を説明する理論を「積み木理論」(*ibid.* p. 220)と呼ぶ。彼が「積み木理論の哲学者」と呼ぶのは、イギリス経験論(Berkley, Hume, Mill)であり、曖昧な候補としては、行動主義的分析、Ogden and Richards and Charles Morris、Quine、Griceである。彼らが積み木理論をあきらめた理由は、言語の意味を経験的に解釈しようとすると、文を出発点にしなければならず、「語の意味論的特徴は、文の意味論的特徴から抽象される」ことにある。たとえば、もしある語「キリマンジェロ」がある対象(山)を指示することを説明しようとする、それを含んだ文「あれがキリマンジェロだ」の意味論的特徴の分析を出発点にしなければならない。これらの文の意味論的特徴から、語の意味論的特徴を抽象することは、例えばクワインが『言葉と対象』で「分析仮説」によって説明しようとしたことである。クワインは他者の言葉の理解を翻訳として理解し、その翻訳マニュアルが複数可能であることから、翻訳の不確定性を主張した。また指示についても不可測性を主張した。「翻訳マニュアルは、一人の言語の文から他の人の言語の文へ進む唯一の方法であり、われわれは、翻訳マニュアルからは、語と対象の関係について何も推論できない」(*ibid.* p. 221)

しかし、デイヴィドソンは次のようにも述べている。

「もちろん、我々自身の言語の中の語が何を指示しているのかを知っている、あるいは知っていると思っ

ている。しかしこれは、翻訳マニュアルが含んでいる情報ではない。」(*ibid.*)
「翻訳は、純粹に構文論的観念である。指示の問題は、構文論のなかには生じない。ましてや、構文論の中では、解決されない。」(*ibid.* 221)

彼は語が何を指示するのかを知っている、あるいは知っていると思っ

ている。しかし、語と対象の関係を説明することが出来ない、ということである。彼が「キリマンジェロ」について、自分自身に別の言葉で説明しても、それはいわゆる同音翻訳にすぎない。デイヴィドソンも「キリマンジェロ」が何を指示しているか知っ

ていると思っ

ているが、それを説明できないということである。なぜなら、説明の時に使えるのは、文だからである。その説明は、言語の外の対象に届かないということだろう。

われわれは、次のように言える。

①「キリマンジェロは、アフリカで最も高い山だ」

ここから、われわれは次のように言える。

②「「キリマンジェロ」は、アフリカで最も高い山を指示する」

これは、語「キリマンジェロ」の指示対象を説明しているともいえるのではないか。これは、辞書的な意味(翻訳)を述べているにすぎない、とデイヴィドソンならばいうかもしれない。しかし、

そのように理解するときには「アフリカで最も高い山」は語に言及していることになる。つまり、その場合には、次のようにい

うべきである。

③「「キリマンジェロ」は「アフリカで最も高い山」を意味する」

しかし、②について、デイヴィドソンは“Es regnet”のときと同様にその真理条件を経験的な調査によって述べる事が出来るというだろう。したがって、②の意味は真理条件によって示されることになる。②のように理解しても、相変わらず、語の指示対象には届かない。

さて、このようなDavidsonに対してどのように応答したらよいだろうか。

人がある山を指差して、「あれはなんという山ですか」と問われて、「キリマンジェロ」と答えとしよう。この返答の完全文をわれわれは次のような同一性言明と考えたい。

「<指差し>=キリマンジェロ」

この同一性言明が真であるとは、この同一性が成り立つことである。両辺の指示対象が同一であるということである。一語文においてすら、第一に接近可能なのは、語の意味ではなくて文の意味である。しかし、同一性文の意味はきわめて明白である。左右の表現の意味から文の意味が合成されることも明白である。このことは、デイヴィドソンへの反論にならないだろうか。

私は、部分的には、反論になっていると考える。しかし、これだけでは反論できない「指示の不可測性」がある。それはクワインが主張したことであり、デイヴィドソンも同意している論点である。

(3) クワインの「指示の不可測性(inscrutability)」

クワインは、『ことばと対象』で指示の「不可測性」(Quine, *Word and Object*, MIT, p. 53)を主張する。この指示の「不可測性」とは、次のようなことである。

クワインは、フィールド言語学者が、未知の言語の翻訳を作る作業を思考実験する。現地人が「ギャヴァガイ」というときに、ウサギがいることを何度か観察して、言語学者がウサギを見たときに「ガヴァガイ?」と訊ねて、肯定を返事をえる、というような仕方、翻訳をすすめてゆく。しかし、言語学者がウサギを指示しているつもりでも、現地人は、ウサギ性、ウサギの出現、ウサギのfusion、などを指示しているかもしれない。言葉の使用の振る舞いにおいて「ガヴァガイ」と「ウサギ」が一致していても、それだけでは指示対象が同一であることを確認できない。それが経験によってズレをなくしてゆける、というような意味の間違いではない。

クワインもデイヴィドソンもこのような語の指示の不可測性は、多言語の翻訳の時だけでなく、母国語の学習でも成立すると考える、そしてもし指示対象の複数の可能性があり、自分のルールと他者のルールが一致しているかどうかを確認できないのだとすると、自分が自分のルールに正しくしたがっているかどうか、確認不可能であることになる。つまり、それは無意味である。つまり、自分はある語である対象を指示しているつもりでも、それは無意味である。

(4) Brandom の singular term 論

もしBrandomがいうように、単称名辞と述語を、他の表現による代入推論が対称的であるか、非対称的であるかによって区別できるのだとすると、次の①の下線部に②の下線部を代入することが出来る。つまり「①ならば②」という推論ができ、かつ「②ならば①」という推論も出来るとき、「アメリカ合衆国の最初の郵便局長官」と「フランクリン」は単称名辞である。

① 「アメリカ合衆国最初の郵便局長官は、二重焦点レンズを発明した」

② 「フランクリンは、二重焦点レンズを発明した」

これに対して次の③の下線部に④の下線部を代入することが出来る。つまり、「③ならば④」という推論が出来るが、しかし「④ならば③」という推論は出来ない。このような非対称的な代入推論であるとき、それらの下線部は述語であるという。

③「フランクリンは、歩く」

④「フランクリンは、移動する」

(Cf. Brandom, *Articulating Reasons*, Harvard UP, 2000, Chap. 4)

「…ならば…」という形式の文は条件文であり、ふつうに言うところの推論ではない。しかしこれをブランドムは実質的な推論(material inference)と呼び、通常の推論形式よりもより基底的なものとする。通常は、妥当な推論を、真理の概念をもちいて、前提が真であるならば結論が真となる推論を妥当な推論と定義する。しかし、Brandomは逆に、妥当な推論において、前提の性質が結論の中に保存されるものとして真理を定義する。したがって、Davidsonにおいて真理が定義不可能な概念であったのとどうように、Brandomにとっては妥当な実質的推論は定義不可能な概念になるのかもしれない。したがって、単称名辞「アメリカ合衆国の最初の郵便局長官」と「フランクリン」もまた同義であるから、対称的な代入が可能なのではなくて、対称的代入可能性ゆえに、同義なのである。

ここからBrandomは驚くべきことを主張する。

「相互に代入可能な名辞の同値なクラスは、ある対象を代表する。対象の代入による定義から、ただ一つの単称名辞がある言語について語ることは意味が無い。唯一つの仕方（一つの名辞によって）言及されることが出来る対象について語ることも意味が無い。」(Brandom, *ibid.* p.140)

「「言語の限界は、私の世界の限界を意味する」[ウィトゲンシュタイン]。「なぜ単称名辞があるのか」という問いを問うことは、「なぜ対象が存在するのか」という問いを問う一つの方法である。奇妙でかつ驚くべきことに、これらの二つへの答えは、つぎのとおりである：「なぜなら、条件法が意味しているものを意味するものを持つことは、大変重要であるから」」(ibid. 155. 全く同じ文章が、Brandom, *Making It Explicit*, Harvard UP, p. 404 にも登場する)

(5) テーゼ「指示は、問答の中で成立する」(未完成)

このテーゼが意味するのは、「質問も返答もそれだけでは対象を指示できない」ということである。文を発話するときに行なわれていることが、同一性の主張であるとする、そこでは両辺の表現の指示が同一であることを主張している。指示は、二つの表現の指示の同一性の主張において成立する。

「あなたの車はどれですか」「あれです」

もし問いを考慮しないで、この「あれです」発話だけで指示対象を確定しようとしても不可能である。

「私の車=あれ」

という同一性言明において指示が確定する。では、問いの中の「あなたの車」は何を指示している

のだろうか。質問者は、その車がどれであるかわからない。しかし、「あなたの車」でおそらくその場に一台ある相手の車を指示している。しかし、この指示は対象まで届いていない。

二つの指示のかさなりによって、我々はおそらく指示対象の限定に成功する。ブランドムが言うように、同一対象を指示する単称名辞は、少なくとも二つ以上必要であるとする、問いと答えは、それぞれが同一の対象を異なる仕方で指示することによって、互いの指示を成立させているのである。